第１回教育懇談会 議事録

日時：平成 24 年 5 月 29 日（火）
10:30～12:10
場所：愛知県公館

＜大村知事＞

みなさんおはようございます。本日は、お忙しい中、また、遠方からもお越しをいただきましてありがとうございました。皆様には、この愛知県の教育懇談会にご出席いただいて、重ねて感謝を申し上げたいと思います。

教育については、まさにお一人お一人、皆さん、お考えがあるということだと思いますが、その中で私は、前から、国会議員をやっていた時から、よく地元の市長さんからよく聞いたんですけど、選挙で選ばれた首長が、やっぱり教育の問題、その地域の子供たちの教育に責任を持つということが、本来あるべきではないのかということで、教育委員会制度というのは、趣旨はわかりますけど、その兼ね合いを含めて、いろんな課題があるのではないかと言うことを聞いておりました。私自身も教育委員会と協議をしながらですが、やっぱり選挙で選ばれた首長が、その地域の子とも達の教育、それから青少年の育成に責任を持つということがあっていいのだろうと思っております。

そういう中で、いろんな課題が言われておりますが、今一番日本が直面しているのがグローバル化ということかもしれませんし、また、こういった少子高齢社会の中でどういうふうに持っていくのか、そういったことも含め、大いにいろんな方のご意見を聞いて、方向を作っていきたいというふうに思っております。

特に、今こそ日本が、そしてこの愛知がやっていくのは、人材がどういう厚みを増していくのかということが大事だと思っております。

そういう意味で、この教育懇談会も、まさに縦横斜めから、ありとあらゆる観点で、ご意見をいただいて、教育の課題を一回全部洗って、そして個別具体的なことは、また専門家といいますか、具体的に事務方を含めてやっていただければいいと思いますが、大きな大きな方向性、課題を、鋭くご指摘いただいて、それを活かしていければというふうに思っております。

例えば、私も時々申し上げるのですが、愛知の中等教育のあり方、それから、高校入試の制度ですね、これももともと１校入試から学校群制度になり、複合選抜に替わりということでありますが、私自身もここで高校入試をしまして、ちょうど学校群制度が始まったとこでございまして、江川さんとほぼ同じくらいの。僕は 60 年の 3 月。（江川さんとは）1 年違いますね。まあ、そんなこともありまして、あと、公立、私立の在り方。これも昔か

らの課題だと思いますし、あと、地方分権の時代、市町村それから市の教育委員会の中にやっぱり権限を下ろしていきたいし、また、学校現場に、もっともっと創意工夫ができて発揮できるようにしていきたいというふうに思っております。

そういう意味で、今日は、教育の関係者、専門家の皆様からですね、産業界、そしてシンクタンクのみなさん、それからあの今日は本当にお忙しい中、江川さんにお越しいただきましてありがとうございました。

江川さんとは、昔、7，8 年前に何回かテレビでご一緒したんですけど、あの 7，8 年前にたけしさんの平成教育委員会という番組に一緒に出ました時にですね、人文系はまだ覚えている訳ですよ、だから歴史とか国語とかね地理とかね、だけど、理科数学なんかの中学校くらいのひねった問題が全然分からんと。江川さんがすらすら解いているのですね。番組の中で、問題が解けたら料理が食べれるというそういうやつでね、最初僕は食べれなかった。2 回ぐらいなんとかクリアしたんですけどね。終わった後、「江川さん、何でそんなに」と言ったら「いやいや大村さん無理ですよ。理科とかこんなのやったことないでしょ、しばらく。」と言ったので「そうなんですよ。何で」と言ったら、「僕は数学の教師やっていたから。」そんな話で。そうかすごいなと思いました。

そんなことも含めですね、是非、しっかりといろんなご意見をいただければというふうに思っております。

まあ、いろんな課題ありますし、この問題で大阪の橋下さんともだいぶ意見交換をしたことありましてね、去年の夏から、秋、冬、年末、年明けに、橋下さんからも電話がかかってきて、「大阪でも教育改革やるし、まあ石原都知事ともね、こうやって話をして、大いにやっていこうという話がありますけど、是非愛知でも一緒にやりませんか。」という話がありましたが、僕は、橋下さんには「大阪と愛知ではだいぶ現状が違うよ。」と。まあひとつ例を挙げると、ここは昔からあの日の丸・君が代が当たり前の世界でなんで、今でも学校現場では、全部、日の丸・君が代、国旗・国歌の斉唱までやっているし、愛教組の組合の皆さんも、「うちのメンバーで君が代歌わないやつはいません。」と、こういうことです。「いたら教えてくれ」と、いうぐらいの話なんで、だいぶ違うと思いますが、そういうものも含めていろいろ課題があると思いますので、本当にみなさんの闊達なご意見をいただければと思っておりますので、よろしくお願いをいたします。私の話、ちょっと長くなりましたがどうかよろしくお願いします。ありがとうございました。

〔事務局から出席者紹介・資料確認〕

＜大村知事＞

それでは、これより皆様との懇談会に入りたいと思っております。本日のテーマは第 1

弾でございますので、愛知の教育をめぐる現状と課題ということでありまして、テーマを設定せずにフリーディスカッション。まさに委員の皆様の問題意識というのを目一杯言っていただいて、それをまた2回目以降に、今日はこのテーマで、もしそれでさらにということであれば、分科会をつくってさらに他の方も来ていただいて、いろんな意見をいただく。いろんなやり方があると思いますけど、それはもう、これだけの人数なので、ざっくばらんに相談しながら、進めていければと思いますので、よろしくお願いいたします。そして、なお、今日のですね、マスコミにはフルオープンでやっておりますし、議事録はあの、後日といいますか、まあ明日かな。ホームページで公開ということになりますので、その旨よろしくお願いを申し上げたいというふうに思っております。それでは、まず資料を準備しておりますので、県の事務方から手短に説明をお願いします。

〔事務局から資料説明〕

ありがとうございました。それでは、早速ではございますが、貴重な時間でございます。早速皆様からご意見をお伺いしていきたいというふうに思っております。それでは名簿の順にまずはですね、本日のゲストの江川さんから、順次お願いを申し上げたいというふうに思っております。

＜漫画家　江川達也氏＞

愛知県というのは、大阪や東京と違って、皆、保守的なんですよね。だから、改革が必要なのかどうかがまず疑問点で、実際いろいろ取り組まれているんで、排他的なところが問題なんですけど、県民がその意思があるのかどうか。僕自身は教員をちょっとやってすぐやめて、愛知県とか名古屋市の教育はダメだと思っていたんですけど、個人的な教育論であって、改革志向だったんですよね。自分が子どもの頃に、学校があまりにもぬるくてレベルが低すぎて、くだらないと思っていて。もっと勉強したいとか、自分で考えたいと言う人にとっては、学校は苦痛でしかなかった。自分が教員になって、変えようと思っていたんですけど、納税者である市民県民は自分がやりたいと思う教育はあまりやりたくないということが分かったんで、それで税金で食うのも何なんでさっさとやめて、東京へ行って漫画家になって、自分の主張するようなことを漫画の中に書いていこうと思ったんですけど。

ぶっちゃけ言っちゃうと東京から見ていて、大阪で橋下さん頑張ってますと、東京で石原さんやっていると、目立つわけですよ。ぶっちゃけ言っちゃいますよ。大村さん、河村さんがあまり目立っていないと。今改革の時期なんで、ひとつぶち上げないといけないという状況からこの会ができたのかなと勝手に類推したんですけど（笑）。

ただ、すごい改革したいという意志があるのであれば、すごい改革すべきところは山ほどあるし、そんなに改革しなくて、現状でまあまあでよければ、愛知県は問題点少ないんで。排他的で外に出て行かないという問題点あるけど、それは生き方なんでね。ザックリ改革したいんだったら、すごい意見多くて。

例えば、ちょっと前にゆとり教育が何故失敗したか。愛知県というのは基本的に独創性はないと思うんです。個々は頑張ってるんだけど。僕自身、愛教大に入った時にはほとんど教員になる人たちばかりだった。30 年ぐらい前ですけど。その時には保守的で、今の教育に満足している人たちが教員になる。改革したい人たちはほとんどいなかったんですよね。落胆をまず最初にしたんですけど。結局は、教員がそういう形である教員に対して、マニュアルをある程度与えて、マニュアルの中でモノを進めるのはいいけど、ゆとり教育は自由に考えてくださいみたいなところがあって、結局失敗するわけで。改革するんであるならば目標は目標として設定はするべきだけど、教員をどう教育するか、その教員を教育する教員をどう教育するかみたいなものが一番必要だと思っていますね。

何処かに教育研究所みたいなものを設置して、そこでマニュアル作りとか、あとはメディアが発達してきてインターネットとか、あとは個人で漫画も作れるし映像も作れる時代になっているんで、映像教育を通じて、教育の効率化、そして、よりできる人にはできるだけの教材を与えて、できない、進度の遅い人には遅いなりの教材を与えていくという効率化はできると思う。そこらへんは改革、県民や市民が望むのであれば改革すべきだと思います。

＜大村知事＞

望むのであればね･･･。

＜漫画家　江川達也氏＞

望まない感じがするんですよね(笑)。現状でいいと思っている人が多いような気がする。ただ、俺自身は、今のままだと将来に向けてちょっと心もとない感じはしますね。実際には、インターネットとかいろんなものが進んで、メディアも進んでいるのですけど、教育というのはメディアとの対決でボロ負けしているわけですよ。要するに、エンターテイメントというのは現実逃避ですから、教育というのは現実を見てどう解決するかなんで、それについては対立するわけで、方法論はメディアの方が持っているわけで、教育は立ち遅れて、もう何十年も遅れているという状況なんで、それと対抗して闘うならば、改革しなければいけないと思います。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

私は今、岐阜県に住んでおりまして、ただ、自分自身は名古屋で生まれて、途中尾張旭市に引っ越したんですけれども、教育自体はずっと愛知県で、幼稚園から大学まで全部愛知県でした。今日は、いっぱいメディアの方にお集まりいただいて、最初、この話をいただいた時にはそんなにメディアに注目される会議ではないのかなと思っていたのですが、知事が前、記者会見のときに入試制度の改革について若干触れられたということで、俄然ここに注目されて、これだけの方がお集まりになったんじゃないかと思う。逆に言うとそれだけこのテーマには関心があるし、私も会見がされて、翌日各紙に出て、えっ、江口さんこんなのに出るの、私言いたいことあるわ、という方が結構一杯いて。私、岐阜県だもんですから、全然愛知県の最近の入試制度のことを知らなかったんですが、いろいろ、聞けば聞くほど、これはどうかなと思うことがたくさんありました。これはまた、追々、その話になってきた時にお話します。

私自身、それとの関連を含めて、このテーマ、教育のテーマって、それぞれ、自分の教育歴が、どうしても根底、バック、ベースにあって話が出てくると思いますので、私自身は尾張旭の普通の公立中学校をでて、知事とちょうど５つ違いで、40 年の 3 月生まれで、学校群世代です。名古屋の学校群の７群というのを受けて、明和・松蔭という群ですね。尾張旭から、明和の場合ですと、明和はすぐそこですから、瀬戸線で通って３０分くらいのところ。もう一つの松蔭高校というのは、名古屋駅から近鉄電車に乗り換えて、また三つ西にいくということで、大分通学の距離が遠かった。あと、その時点での学校に対するイメージというのは、明和高校というのはすごく進学校で、松蔭高校というのは、あまり知っている人は知っているけど、知らない人は知らないと。そういう感じだったんで、受験生の多くは明和に行きたいなと思っていた。私もそうだった。ただ、学校群制度は半分ずつということは分ってましたので、松蔭に行くってことになったときに、あーあ、松蔭に行っちゃったなと思いましたけども、それで恨み言めいたことを思ったことはないし、入って、たまたま私はその高校と相性が合ったというか、幸福だった。私自身は松蔭に行ってとても幸せだった。明和に行ったらどうなっていたかわからないけど、松蔭に行ったことを何ら悔いていないので。私は適応できたんですけども、私の同級生の中で、やっぱり入った時に思った方にいけなくて、卒業式のときまで、明和に行ってたらこうじゃなかった、と言って卒業していった人がいるんですよね。確かにね。入試制度との関連でいうと、私自身はそういう経験を持っています。解決するには、生徒が行きたいところ、行って納得できるような選択方法というのを重視して考えていく必要があるかなと思っています。

もう一つ、私自身、経済の分析をするのが本業で、教育はそんなにメインじゃないですが、経済やっていると、どうしても教育に関連してくるところが出てくるんですね。例えば経済が伸びている地域というのは、教育の水準がグググッと上がってくる。例えば、愛

知県の三河なんかそうですが、今回の会議に出るのは想定せずに、経済の分析をするために、何高校から何人名大とか東大に入ったかというデータを 1971 年から一番直近まで入れてあるんですよ。何のためかというと、何高校が上がったか下がったかというのはどうでもよくて、どの地域が伸びたか、どの地域が沈んだかを分析するためにこれをやってみたんです。そうすると三河というのは、昔、愛知県内から名古屋大学に入る全体の中で大体 1／4 ぐらい。愛知県内から名古屋大学に合格する人の中の 1／4 が三河の人、3／4 が尾張の人。これが直近でいうと三河 1／3、尾張 2／3。人口比が大体 3：7 ですから、人口比に概ね近いところまで三河と尾張は接近した。逆に昔はすごく広がっていた。これが東大になると、さっき見てびっくりしたんですが、東大の合格者は、三河は昔、70 年代は、大体 12、15、12、21、22、大体 20 人弱くらい。それが、この春の場合 75、その前が 61、その前が 72、もう４倍くらいになっている。これはやっぱり西三河を中心に経済力がグーッと伸びた。みんな親御さんが教育に投資をして、学力がグーッと伸びた。これはある種いいことだと思います。

あともう一つ。人がどこに住みたいかという時に居住地を選択する場合というのは、この地方の場合は特にそうなんですけれども、いい学校があるところにみんな住みたがる。というのは、東京とか大阪というのは、私立受験が盛んですから、自分の住んでいるところの学区のレベルが悪くても塾行って私立行けばいいやとなる。愛知県の場合はどこに住むか、どこの学区にするか、どこの小学校の学区に行くと、どこの中学校でそこから何高校に何人は入れるかと、概ね決まってしまう。受験をするのと家を選ぶというのは同じような感じがある。

その視点で見ると、愛知県、特に名古屋市内の場合はすごく気になることがあって、松蔭高校は名古屋市の西の方にあって、学校群時代というのは、名古屋の西の方の学校でも、松蔭高校でも名大に十数人入って、中村高校は 70 とか 60 とか、すごいいっぱい入って、これは中村高校が明和と組んでいたというのが大きいと思いますけども。つまり名古屋の中で、西と東に半分ずつにすると東半分の学校から名大に行った人数というのが 380 人、西の半分から名大に行った人数が 26 人、10 分の 1 なんですね、今現在。学校群時代の時には、この格差はこれほどひどくなくて、大体東の学校から 300 から 400 くらい、西の学校から 150 とか、130 くらい。ということで、中村高校とか松蔭高校とか、名古屋西とか、いくつかそこそこの進学校が学校群制度の時にあった。学校群制度のおかげで、これはなだらかになった、東西格差というのが。結構、西の子達にとってはそれはそれで良かった。

今、ＪＲの線路で東西で分けると西側は 8 人しかいない。これはやっぱり同じ教育環境として、あまりに差がひどいんじゃないか。この部分というのを放置してしまうと、近所に徒歩・自転車で通い易いところに進学校がないとそこに人が住まなくなる。住まなくなるとその地域のポジションというのは、どんどんどんどん落ちていってしまう。大都市と

いうのは、そういうふうにスラム化みたいな感じはどこでも出てきますけれども、名古屋とか愛知県というのは、それがないのが比較的昔からの文化であって、名古屋・愛知のいいところだと私は思いますので、その視点というのを今回のこの会議で考えていただきたいなと思います。

＜大村知事＞

そういうこと言うなら、僕は碧南のど田舎だもんで、僕のときは選択肢なんかないんだよ（笑)。まっといいたいことある。名古屋なんか恵まれとる、何を言っとるということもあるけど（笑)。

＜愛知県経営者協会専務理事兼事務局長　柴山忠範氏＞

産業界代表ということで、お招きいただいておりますので、そういう方面からお話をさせていただきたいと思います。企業サイドは、あくまで、卒業した人を受け入れて、育てて、一人前の社会人として働いてもらうということになるわけですので、あまり教育界に対して、口を出せる立場にはないのですが、ただ、私どもの会議でも度々、教育のことは話題になります。学生さんや親御さんは、最終的には就職という問題が最大の関心事になると思いますが、そこでよく、最近、求められる人材ということが度々マスコミなどで取り上げられることがありますが、私どもが申し上げているのは、基本的に求められる人材というのは、昔から変わっておりません。確かに、今、グローバル人材とか、国際人といったことがよく言われると思いますが、正直言って、学校を出て、会社に入ってきて、すぐにグローバル人材になるなんてことはありえない。自分の会社で一人前に仕事ができるようになって初めて海外に出て行って仕事ができるということですので、企業が求めているのは、会社に入って最初の仕事をきちっと覚える基礎的な能力であり、語学があればなお結構ということですが、そこのところが、年々のマスコミの捉え方はブームで変わってきてしまうので、学生や親御さんは、どうしてもそれに振り回されて、最終的には学校までも振り回されて、目先の教育に飛びついてしまっている。私どもはそういったことを大変危惧しております。企業側のアナウンスメントもいけないのかもしれませんが、きちっと基礎的な、もっと言い方を変えると基礎学力のしっかりした人を求めている。もちろんメンタル面だとか、性格ということは必要なのですが、そういったことをぜひきちっとやっていただきたいなと思っております。

先ほどモノづくりの問題も知事はおっしゃっておりましたが、私どもも企業の側ですので、モノづくりの人材は非常に重要だと思っています。その視点から、愛知県の人材を見ると、私どもは非常に危機感を強めております。

先ほど技能五輪の話もありましたが、多くの人は愛知県の人ではないですね。多くは他

県から来ていただいて、企業の中で育って、技能五輪に出て行っているわけで、最初から愛知県で生まれ育ってという人はあまり多くない。モノづくりを支える人材といっても私どもから見ると、愛知県はちょっとどうかなと思います。むしろ人材の供給源は、九州であり、中国・四国地方でありという感じを我々は強く持っております。

そういう意味では、いわゆる専門学校についても、もっと力を入れてもらいたいと思っております。ちょっと言葉を変えると、やっぱり愛知県は豊かなんですね。さきほども専門高校と普通高校という話がありましたが、多くが普通科に行ってしまう。普通科に行けない人が工業や商業へということになってしまっていて、全体としては、工業、商業とも他県に比べると低いというイメージを持っています。

では、大学はどうかというと、愛知県にはたくさんの大学がありますので、非常にたくさんの学生さんが大学に進学します。先日、私ども調査を発表しまして、大学の平均レベルは下がっている。格差が広がっているということで、全体的な平均が下がった結果、大学卒の人が、現場の従来は高校生がやる仕事と思われていた仕事に就いているという会社が非常に増えてきている。これは一つの理由ではないと思いますが、そういう面では、大学に行けば高度な知識を使って企業の中枢の仕事をやるというイメージからかなりずれてきているということですので、これを教育全体でどういうふうに考えるかということは、私ここで答えを持っているわけではありませんが、企業の多くは、愛知県がダメなら全国から採用しているわけで、愛知県内の企業の多くは愛知県内の大学に頼っているわけではありませんが、そういう実情をしっかり捉えて、今後、高等教育、中高の教育をどういうふうに考えていくのか、しっかり考えなおす必要があるのではないかなと私は思っております。

＜関西大学政策創造学部　白石真澄氏＞

住まいは、千葉県の幕張というところでございますが、出身は大阪でございまして、小学校から高校までは公立で教育を受けて、大学だけが私立でございます。私どもの子どもは、大学３年と１年生でございます。それぞれ東京の私立大学に行っておりますが、休学して海外に出しました。私自身の問題意識として、きちんと英語でコミュニケーションをし、海外で仕事をしていくということも視野に入れてほしいということでございます。私自身は、大学の教員になりまして11年目でございまして、まず、はじめに日ごろの仕事の中で感じている問題意識をお話しする中で、この懇談会のテーマになるのではないのか、ということを３つお話をさせていただきたいと思います。

一つは学生の学力なんですけれども、入試のための勉強になっていまして、とても恐ろしいことが起こっているんですね。入試で日本史や地理を勉強せずに入ってきている子がいますので、たとえば、今回、原発事故が起きても福島の位置が分からない。地理という

のは全ての学問の基本であり、気象や安全保障を学ぶ上で必要なものですが、ここの知識がすっぽり抜けている。世界史は必修なので世界史の知識はあるんですが、日本の歴史があって同心円状に世界史があるのですが、従って学問分野の関連性がない。ＡＯと個性を問う入試が導入されてから、全ての学生がベースとなる知識を兼ね備えているわけではないんですね。従って学生間の学力の差が激しくなっているというのが１点目であります。ですから、愛知県で新しい時代の学力をどうとらえるのかというのが非常に重要な問題ではないかと思います。

2 点目に非常に内向きということでございます。2 年生、3 年生に仕事をどうするのか問うたときに、奈良の人口数千人出身の子が地元に就職すると言うんですね。地元のどんな会社があるのと聴いてもそれは知らないと言うんですね。親御さんの地元に置いておきたいという価値観、意識が刷り込まれているのか分かりませんが、国内の地元しか目が向いていない子が増えているということですね。化学反応の触媒のように、何か化学反応を起こさせるようなものを投与しないと、外に学生たちの目が向かないのではないかと思います。

3 点目は、親の経済状況、20 年近くサラリーマンの給料が下がっておりますので、学費を稼ぐためにアルバイトを一所懸命している人が増えておりまして、勉強どころではありません。多分、中学校、高校も同じような状況で、河合塾さんいらっしゃって、恐縮ですが、学校の中だけでしっかりと学力をつけられるよう、もう一度中心的な視野に置いておかないと、補習を前提とすると、親の経済力による学力の差がますます大きくなるのではないかということでございます。

最後にやりたいことが見えないということでございます。インターンシップというものがイベント的に行われていて、大学 3 年生頃から職業ということについて考え始めるのですが、世の中にどのような仕事があるのか分からない人が多いんですね。自動車が好きだということで、どこを受けるのと聞くと、トヨタ、日産、ダイハツ、スズキと。自動車を分解したら、例えばアイシン精機、デンソーもあるし、カーナビ、オーディオ、塗装の会社もあるのよ、というとイマジネーションが拡がってくるんですね。

私は、大学の 3 年生から仕事を考えていては遅すぎるのではないかと常々思っております。こういったことが問題意識なのですが、では、何をすればよいのかということですが、1 点目が多様性ではないのかと思います。大学を卒業して、それに相応しい仕事が世の中にあるのかというとそうではありません。モノづくり、農業、医療、看護、様々な仕事があるのですが、それに相応しい人材が今の教育の中でつくられているのかというと極めて疑問を持っております。ドイツで実践されているように、しばらく現場に出て、学校に戻って検証するというような、行きつ戻りつで自分の知識を体系化していく。こういうことをやっていかなければ、日本の職業に合った人材を育成していくことは難しいと思います。

これは画一的かつ金太郎飴的な教育を打破するということです。

2 点目は新しい時代の学力。神奈川県は日本史を条例で必修化しました。中部地域、名古屋の人材で何を学ばせるのかということを再度検証する必要があるということでございます。

日本は敗戦後で、脱亜入欧の掛け声の下に、産官学の分野でエリートをつくってきました。頭でっかちで知識があるということだけではなく、社会にコミットしながら、社会に恩返しをしていく。イギリスで言えば、ノーブレス・オブリージュのような視野を持ったエリートをどう作っていくのか。残念ながら、ハーバードのＭＢＡで日本人の学生が一人もいなくなったということであります。多くは中国・韓国の学生なんですけれども。海外の人たちと真剣に議論できるエリートがいなければ、日本は沈んでしまいます。親の経済力だけでやるのであれば、できる子とできない子がいてフェアな社会ではないと思います。意識をして、海外に出していく、新しい時代のエリートを作っていく。これが私の問題意識であります。

最後に知事が入試制度をこれから考えていくということをおっしゃったわけでありますけど、私は教育を変えていくためには、入試制度だけでなく、教育のカリキュラム、内容そのもの、そして教員の資質の問題、多様性ある教育を担保していくためには、教育大学を出た人だけで果たして足りるのかどうか、社会の中で活躍した人をもう一回教育現場に投入していく必要があるのではないかと思うんですね。私は、名古屋市の子ども青少年局の参与をさせていただいた時代に、いろいろな企業の人たちとお話しをさせていただきました。そのときに、日本ガイシの柴田さんは、うちは子育てに貢献できる商品はないけれども、科学雑誌に論文を書けるような先生はいっぱいいるからお手伝いできるよということをおっしゃっていました。専門家を教育現場に投入して、大学並みの知識を中学、高校で教えていく必要があるのではないかと思います。そのときに、子ども達の興味関心が開花していくのではないかと思うんです。

最後に教育というのは学校だけではできませんので、地域社会の協力や企業さんの協力があってはじめて素晴らしい教育が実現できると思うんですね。教育を変えていくためには、地域社会の保護者の本気、こういうものも問うてみる必要があると考えております。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

受験生の動向の視点からお話をさせていただきたいと思います。北海道のある大学の受験生出身地の第１位は北海道であり、第２位は愛知県であるとおっしゃっていました。その国立大学に限った現象ではなくて、愛知県の受験生はとにかく国公立大志向が強い。愛知県の国公立志向というのは、おそらく中学から高校のときの公立高校志向ということと通じると理解しています。愛知県の受験生の国公立志向理由には、お金の問題がベースに

あると思いますが、国公立神話、例えば、丁寧な教育や少人数教育などの伝統があり、私学がなかなか育たない。また、地元進学率が一番高い県ですから、地元の教育機関が独自路線でやっていけば、愛知独自の教育ができるのではないかと思います。

お手元にあります「あいちの教育に関するアクションプランⅡ」の５ページには、平成21年度の県政モニターアンケート結果が載っております。今後、どのような教育分野に力を入れていくべきかという質問に対して、「学力の形成」よりも、「道徳教育」「キャリア教育」が上位に挙がっています。愛知県民は、学力も必要だけれども、その前提となる家庭教育や社会とつながる教育を求めているということです。私は、ここにヒントがあるのではないかと思います。先ほど、白石先生から「河合塾さんには悪いけれども、学校の中だけで学力を鍛えてくれ」というお話がありました。私もそう思います。もし学校だけで教科学力を十分に鍛えてくれれば、河合塾はキャリア教育もやります。真のキャリア教育は学力の一部だと思っています。地域や学校、民間の塾も含めて、一緒になって教育していくことが必要だと思います。愛知県に教育改革する余地があるとすれば、学力観をもう一度広く捉えなおして、教科教育、キャリア教育、道徳教育を一体とした仕掛けを構想してみるべきではないか。それが実はグローバル化や多様性に対応した愛知独自の教育の柱になるのではないか、と感じています。愛知県が他県にくらべて特徴的なのは、地元の子が地元に進学するということです。地元で逸材を輩出できるわけです。地元愛知県で発祥した河合塾も、そういう構想があれば一役買いたいと思っています。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

あまりセンセーショナルな発言ができないと思いますが、個人的なことを言いますと。私、３人子どもがいますが、３人とも東京、大阪、仙台と県外に出て行きました。1 人は公務員になりながらもやめて、フランスにワーキングで行って、先週の月曜日に返ってきました。私は愛知県どっぷりの人間ですが、結局、何があって人が外に出て行かないとか、いろいろなことが起こっているのかなということを今考えているわけです。いま全体的に日本の子どもに自己肯定感とか、自分に対する自信とかがなくなっていると言われているのです。これがどうしてかということだろうと思います。考えてみたら、50%以上が大学に入る時代です。かつてみたいに、入りにくく出やすい時代から、入りやすく出やすい時代になって、学力が当然下がってしまうわけです。そういうことを考えますと、結局、小学校、中学校から何をやっていかないといけないか、それぞれの段階でやらないといけないことがあると思います。

たぶん小中高から上につないでいく教育がいろいろと考えられて、ある時には典型的に小中一貫とかやってきましたが、これがいいかとどうかも考え直さないといけないと思います。

要は、みんな個性をもっているはずなので、個人個人がどのようにうまく自分の能力を発揮できるかです。キャリア教育もその一つだろうと思います。やはり制度もその時代に合わせて見直すべきことは見直していかないといけない。私は入試にしろ、選抜にしろ、いろいろ含めて、その時代に合った形で変えるべきものは変えるべきだと思っています。今のように平等化している中、例えば普通科が多い中で、やはりみんな競っていくわけですね。先程ドイツの話が出ましたけど、本来的には、もう少し個性をもって、例えば技能的にいいとか、或いはスポーツが得意であるかということを生かせることが大切で、段々上に行って生かせないといけない、将来に見通しがなければうまくいかないわけです。場合によっては、専門高校から大学に繋げちゃえばいいと思っています。例えば工業高校から工業大学に行くなどもっと柔軟に考えていければ、もっとやる気が起こっていくと思います。

そういう改革も私はやってもいいと思っています。私は愛知県どっぷりですが、地方のいろいろな生涯学習関係の社会教育委員を長いことやっていました。教員養成も社会人も一緒だと思いますが、インターンシップってありますよね。私はもう少し大学時代にインターンシップを活用すべきだと思います。例えば、企業に行く場合や、先生になる場合に。とくに先生になる場合も、私は大学の時からインターンシップで、今みたいに４週間一度に教育実習をやらなくてもいいと思っています。場合によっては１週間に一度ずつ行って、そういう形で現場に行った時にソフトランディングできるような形でやるべきだと思っています。学校間での次の段階へのソフトランディングがうまくできる形での教育のつなぎというのが、私は一番重要だと思っています。そのへんのことを含めて考えてみても、今の子どもは気の毒ですよね、20 歳くらいの学生に、「私達、ゆとりで変な教育を受けて、失敗教育を受けてきた」という変な感覚があるんです。こんな馬鹿なことはないと思うのです。ゆとりで育った能力があるわけで、そういうことをちゃんとしっかり確かめ、欠けているものは何なのかということもせずに、「私達はゆとりで」と最初から否定的に受けているんです。これではいけない。

とにかく教育とかいろいろな活動が、私は県全体として１つの流れを出すべきだと思いますが、地方それぞれが特徴をもって、もう少し地域が育てるという感覚は重要なことだと思っています。とにかく地域が自分たちの特徴を生かしながら、地域が子ども達を育てるということが一番大事だと思います。そういうことを含めて、改革とかなんとかは伴ってくる問題だと思っています。

できるだけ個性がもっと伸びていく形で、子ども達も、生徒も、それが認識できるような形での制度なり改革を積極的にすべきだと思っています。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

愛知県はモノづくり県ということで、工業出荷額が日本一です。そういう意味で言えば、愛知県は大変恵まれたといいますか、県全体で見れば、知事が力を入れていらっしゃる東三河の過疎地の問題ももちろんありますが、トータルで見れば、やはりそうしたモノづくり県で、大変活発な産業活動が行われている県です。

本学は、愛知教育大学ということで、私は「教員養成を主軸に教養教育を重視する」といつも言っているんですが、愛知には50の四年制大学があるんですね。その中で、入学定員は愛知県全体で3万4千人くらいです。先程の統計を見ると、特に地元の大学進学率が大変高いということで、愛知の大学は、大変恵まれているということと、18歳人口が他府県で減っている中で、愛知県は7万人をキープしています。プラスマイナス2千人くらいで変動していると思いますが、そういう意味で言えば、大学にとっては全国にも稀な恵まれた県です。だから大学の中身をどう向上させていくかを常に我々は考えているわけですが、愛知県の学長懇話会では、県の教育委員会と連携して、これまであまり四年制大学とはなかったと思うのですが、去年あたりから連携は進みまして、今は連携ネットみたいなものを作って、県のホームページでも各大学の宣伝をしていただくなど，お互いに協力しながら、愛知県の大学に進学できるような発信をしてもらっています。

愛教大では教員になっている人達が大変多く、そういう意味では、今、中教審でも、教員の養成、研修、採用をどうしていくかという議論がなされていますので、そういうものを見ながら、質の高い教員養成ということで考えているわけです。

前から言われておりますように、先程知事もおっしゃいましたが、愛知と大阪とは随分違います。そういう中で、僕らの学生時代と比べますと、大学自身の進学率が増えると同時に、大学人の価値が社会的に高かったと言いますか、昔はどこそこ大学の誰先生の発言を一つのモデルにして憧れることがありました。学生時代には、哲学を語り、生き方を語るというふうなことがありましたが、今はそういう風じゃなくて、大学が通り過ぎる一つのパスに過ぎなくなっているというのが、今のキャリア教育の問題であり、そのことの必要性が求められてきているのかと思います。もちろん大学がユニバーサル化して、我々が育ってきた学生時代とは違うわけですから、そこのところの新しいものにどう対応していけばいいのかが問われています。

さっきも統計がありましたが、愛知県は確かに進学率が高いのですが、そういう統計を見ますと、大学人自身、我々どうしても教育を語る時には経験知でしか語らないんですね。経験知を超えて、今はメディアが大変発達してきて、そういう中で、インターネットを見ればいろんな情報・知識が手に入ってくるので、教育をどう新しく変えていけばいいのか。そういう意味での教育の転換期の中で、新しいものを取り入れながらも、不易な部分は何で、どこをどう変えていかないといけないかということを、もう少し大学人としても真剣に考えていかないといかんなと思っています。大学、高等教育の改革も合わせて、全体と

して進むような議論ができればいいと思っています。

あとは、現場のことで言えば、幼稚園、小・中学校、高校、大学とあるわけですが、多様なことがあります。愛知県は、他の大都市圏と比べて、普通高校は少なくなってきています。普通科が50%くらいでしょうか。こうした点からは高校と大学の高大連携をどう進めるかということも一つの課題になるのかなと思います。多様化した人材養成を愛知県自身が進めてきて、普通科以外にいろいろな科ができています。こうした多様化が本当に生きてきたのかどうなのか、これからどうなのかということを含めて、50%以上の進学率の中で、こういう高校の多様化をどう考えていくのか。逆に高等教育の視点から中等教育を見直していくということも必要なのかなと思います。もちろん入試制度もございますが、そういうことも含めて、いろいろ考えていければと思います。

＜大村知事＞

ありがとうございました。全員の方が一巡しました。言い足りかなったことがたくさんあると思います。

江川さんはずーっと東京におられますよね。東京で見ていると、いろいろな思いはありますでしょ。

＜漫画家　江川達也氏＞

東京も内向きではあるんですよ。日本全体が内向きな感じですよね。まあ、内向きではない人もいますけど。

皆さん、自分の子供のことを言っておられるので、私も言わなければいけないと思っています。家は渋谷にあって、高校１年と高校３年で、下の子が女で、上の子が男の子なんですけど。ずーっと家にいてごろごろしていたいタイプで、暇な時はゲームをやって、あまり勉強しないんですけど、一応、進学校に行っています。

俺自身は、基本的に学校の勉強は全然レベル低いんで。先生の話を聞かずに、漫画を描いて漫画家になった男なんで。少し教員もやっていましたけど、学歴に対しては、別に学校行かなくてもいいし、受験勉強っていうのはバカになるから、あまりやるなと言ってるんだけど。かみさんがちょっと教育に力を入れて、河合塾に行かせたりして、河合塾はなかなかいい問題出すなあとか（笑）。下の子が河合塾で出された問題ができなくて、「お父さん、解いて」って言われて、仕事そっちのけで解かされているんで。なかなか骨のある問題を河合塾さんは出されていて、ウォッチングしてますけど。

さっきも出てたように、何になりたいか分かんないんですよ。勉強するモチベーションがないですよね。教育とは、本人にモチベーションを持たすのがまず基本なんですけど、なかなかモチベーションを持って、目標が決めれないですよね。そういう現状は、皆さん

からも出てますけど。要するに、モチベーションさえあれば、あとは放っといて、いろんなものを出せば、やるわけですよね。下の子のモチベーションなんて、人からどう見られたいかというモチベーションで勉強していて、本来の勉強じゃない。

やっぱり早めにやりたいことが見つかればいいんだけど、見つからないという現状はあるなと。それで、見つけるためにいろんなものを出していかないといけないんだけど、学校では出ないということはすごくありますよね。

学校の先生というのは、もともと先生以外やったことなくて、世間を知らないんで、自分も愛知教育大学を出て、先生やって、一番悩むのは、自分はこういうような教育がいいと思っても、社会を知らないで言えるのかということ。だったら、やっぱり社会に出て、それでさんざん下積みをしてから、分かった上で教育を語るべきだなというのが必要かと。学校教員をどう育てるか、その教員を育てる教員をどう養成するかというのが一番の主眼。

あとは、愛教大の学長さんもおっしゃっていたように、メディア対教育だったりするわけで、インターネットを見れば、いくらでも知識が出てくるわけですよ。でも、知識は出てくるけど、指針はないわけですよ。本人がどう指針を持つか。学校は、そういうインターネットでぐちゃぐちゃなカオスな時代の中に、どうやって生きるべきかという基礎的な能力を付けさせる必要があるんだけれど、付けさせるだけのものを持っている人が教員ではないというところで、やっぱり、親からも子供からも、教師はどうなんだろうと。

ただ、河合塾が良いのは、大学に行かしてくれるというノウハウを作ってくれるんで。ただ、受験勉強してると頭が悪くなるとは教えています。結局、受験勉強は、数学もそうなんだけど、暗記なんで。最終的に問題をどう解くかというのは暗記なんで、うちは 100 点取ると怒るんですけど。「こんな試験で 100 点取って」みたいな。「79 点ぐらいにしとけ」みたいな（笑）。見栄というモチベーションでやっているわけで、本当はカオスな時代をどうやって生きるかということ。

＜学校法人河合塾学習研究部長　谷口哲也氏＞

入試問題には、思考力を問う問題だけでなく、選抜・選別するために、瑣末な知識を問う設問もあります。もし満点を取る子がいれば、そういう受験対策をしているということなので、やりすぎな面も否定できませんね。

＜漫画家　江川達也氏＞

そりゃ頭悪いんですよ。結局、考えさせることって大事じゃないですか。最近、教育が変わって、上の子が中学３年生の時にいい問題が出たんですよ。どういう問題かというと、「豊臣秀吉が、なぜキリスト教の禁止を決定できなかったか」みたいな問題で。うちの子は、自分で考えたらしく、いい答え出したんだけと、ペケもらっちゃってるわけね。結局、

考えさせる問題に対して、教師や文部科学省の説があるわけじゃないですか。それと違うことを考えるとペケをもらっちゃうような、そういうことですよね。数学でも、自分独特のやり方でやるとペケなわけですよ。上の子は、結構独創性があるんで、いちいち自分流にやって、ペケをもらってくるんだけど、そっちの方が頭いいわけで。そういう、受験勉強はある程度のレベルなんだけど、本当に自分で考えるというものを、教育界は消している感じ。思想があるわけですよ、東大の思想が。歴史教育もそうで、その思想に合わないやつは、みんな排除していくわけで、だいたい試験なんてそういうものだと思うんで。受験勉強は大概にしておかないと。(笑)

＜大村知事＞

江川さんは、自分の時は、ずーっと漫画を描いてたんですか。

＜漫画家　江川達也氏＞

基本的にはぎりぎりのところで、試験前2週間、13時間ぐらい詰め込んで。数学科なんで、ちょこちょことやるとなんとかできるみたいな。それ以上、あまり努力したくなかった。

＜知事＞

あとはずーっと漫画描いていたの。

＜漫画家　江川達也氏＞

恋愛もしましたけど（笑)。水泳部で運動したりとか。いろいろしてましたけど、あまり学校には頼らないように。趣味で、地図とかよく描いてたんですけど。歴史は好きだったけど、歴史教育は嫌いだったというか、自分で何か先生に言うと反論されて、潰されるんで。絵も、美術教育は先生がシュールな絵を描かないといい点とれなかったんで、僕は写実主義なんで。学校に対しては非常に反感があるので、教育大学に行って、先生になって、変えようと思ったけど、すぐやめちゃったというわけ。

＜大村知事＞

江川さんは、自分の目標の漫画家になって、大成功して、目標を遂げたじゃないですか。

＜漫画家　江川達也氏＞

僕の目標は、教育への復讐ですから（笑)。復讐というのは、冗談。要は、自分が受けた教育は間違ってたんで、それを正したいという気持ちはありますけどね。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

入試問題の話に戻りますけど、教育改革をやるには何が一番手っ取り早いかというと、大学入試や高校入試の問題を変えればいいという議論がある。半分以上、私も当たっていると思います。

＜大村知事＞

だと思いますよ、私も。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

全国の大学や高校が、生徒にちゃんと考えさせ、かつ選抜可能な入試問題を作っていけば、そういう教育は行われるんですよ。採点の工夫は必要ですが。

＜漫画家　江川達也氏＞

ペーパー試験が難しくて、昔の陸軍の教育がいいか悪いかは別としても、面接で試験を出す、そういうことをやる。

＜学校法人河合塾　谷口哲也氏＞

私が言っている試験というのは、1日だけの90分だけでなく、何日間もやるとか、あるいはペーパーじゃなくて、観察する方法（パフォーマンス評価）など多様な評価手法が可能でしょう。

＜漫画家　江川達也氏＞

幼稚園の試験がそうですよね。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

そうです。最近は企業でも、フェイスブックの過去のデータを全部見て、人事採用の最終選考にするケースもあるみたいですね。

＜漫画家　江川達也氏＞

半年ぐらい教えて、ダメなやつを切っていくみたいな。いいと思いますよ。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

そういうふうに、長いスパンで見ていくと同時に、何を見るかという評価軸を定めてい

く選抜と選考のやり方をちゃんと研究すればいいと思います。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

私はちょっと違うんです。言っていることは分かるんですけど。会社の採用とか大学の入学試験はそれでオッケーだと思うんですけど、高校入試という話になると、結局、義務教育でこれだけ教えておけということはあるわけで、そのやり方が通用するのは就職と大学で、その下はやりづらいんじゃないかなと思いますけどね。

高校入試の時に、例えば面接とか、学校の通常の授業では解けないというか、ものすごく考えさせるような出題をしてしまうことは、そういう中でも入試はセレクションですから、学校でちゃんと勉強してきていない子がセレクションで落ちるという仕組みは、それはそれで。

＜漫画家　江川達也氏＞

それは高校入試という形があるわけで、もっとシステムを変えてしまって、今なんか数学・算数、普通の公立でも３つぐらいにクラスを分けるじゃないですか。やっぱり、すっと分かる子にはどんどん進ませて。ベースのホームルームでやるクラスはそこそこ決めるけど、あとは小学校だろうが、中学校だろうが、高校だろうが、できる人は違う教室に行って、もっとシャッフルできるようにしちゃえば、毎回が入試みたいな感じで、こういうのに興味があって、こういうふうな人はここのクラスみたいな、もっと自由化してしまえばいいのかなとは思います。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

よく新聞に掲載される人気企業ランキングとか、小学校の女の子のなりたい職業ですが、女の子に人気があるのはパティシエとか。あれって、今の子供達のモチベーションというか、持っている情報をすごく表していると思うんですよね。文系だとＪＴＢとか、最近は金融機関も増えているし、要するに、子どもたちはＢtoＣ（ビジネス・トゥー・カスタマー）の会社しか分かっていないし、ＢtoＣの業種しか分かっていないんですね。自分が使ったことあるとか、買ったことある、やったことあるという仕事に限定的です。

教育って、教え育てるではなくて、教わり育つもの。個人個人の動機とか、モチベーションはすごく大事で、一番究極的に考えれば、子供達が自分の目標をいかにしっかり持ち、それにたどり着けるための教育のポートフォリオがどうあるべきかということを、その子供達の数だけ作っていくことだと思うんですよね。その時に、僕は日本のスティーブ・ジョブズになると言っても、日本の今の教育の中ではスィーブ・ジョブズなんて絶対に生まれて来るはずはないし、一回落ちこぼれたら、落ちこぼれたままのような人達を生み出し

ていくような仕組みなわけでしょ。

私は日本の北島康介になる、こういうことをいかに早く目標設定して、じゃあそのためには何をしたらよいかを理解してもらうことが重要。オランダの学校を視察させていただいた時に、スポーツ選手の学校があって、スポーツ選手が、もし体を壊して、この仕事に就けなかった時のために、コンピュータ教育や経済の知識を教育しているんですね。一方、大学でスポーツ推薦で入ってくる子は、体を酷使して、体を壊せば、もう体育会に居づらくなる。この差は、非常に大きいと思うんですね。安心して目標に向かって走れる。だから、入試制度だけでなく、自分の職業設計ないし将来の像はこういうことなんだ、そのためには何をやればいいのかというようなことを、子供達が学習できる機会をどう与えていくかではないかと思うんですが。この部分が、今の教育の中に欠けていると思います。

＜漫画家　江川達也氏＞

山ほどの情報を与えるわけですよね。その山ほどの情報を集積して与える機関を作らなきゃだめです。先生が、みな先生の世界しかないわけで、他の職業を取材して、それを集めて渡すという。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

現実の世界の「キッザニア」みたいなものですかね。

＜漫画家　江川達也氏＞

うーん、まあそんな感じ。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

「子どもをダメにする一番いい方法は、すべて買い与えることである」ということを言った人がいます。以前、上智大学の学長が、日本では何故英語が育たないのかということで提言した中に、入試から英語をなくしたら、会話は強くなると発言されたんですね。実は、先程言いましたように、学校に入る時と出る時の問題なのです。

結局我々は、入ってから安心してやらないのをずっと繰り返してきたわけです。入るためだけにいろいろ選びながら頑張ってきたわけです。自分が何になりたいかということでその学校を選んでいないのです。とにかく入ってからあとで考えると、判断するのを後に送ってきているのです。大学に入ってからどうしようかというのが圧倒的に多くなっているわけです。そのために結局早くから自分が何に適しているかということを、学校教育でやる。興味・関心をもたせるために、回りの大人が本を読まなくて子どもに本を読めというのは無理ですよ。例えば、学校でもそうですが、先生方が本をよく読む、親が本を読む、

そういうのを見て子ども達が育つわけです。その中に、自分は何が好きなのかということを選んでいく機会を増やしていかないといけない。そういう面で、家庭とか地域の連携が問われているのです。

＜漫画家　江川達也氏＞

難しいのは、本人に子供の頃からやりたいことがあると、受験が受かりにくいということがある。

点を取って、今は楽しいことは置いといて、いい大学に行けば、何でもできるようになるよって、昔教えられて、それで東大に行ったけど、結局は何もできない人になってたみたいな。そういうことになっちゃうんで、受験自体を変えていかないと。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

この間、アメリカの協定大学から学生が十人ほど来ていました。その学生達は日本語を勉強していまして、なんで日本語をやっているのと聞いたら、日本のアニメ、映画、マンガに興味をもっていると。たまたまかもしれませんが、そういうことで日本語を学びたいという人達が来ている。留学生は最近アメリカに行かないと言います。今アメリカに行く魅力は一体何があるのか、すぐに思いつかないんです。経済は不調だし、リーマンショックも大変だしなと。日本はハードからソフトにどう国全体をどう転換させていくか、一方で、ハードを維持しながらソフトの面をどうやっていくかという、つまりフェーズが変わってきているのです。

私は団塊の世代で、日本全体で 280 万人いました。今 100 万人です。280 万人を対象にする教育と、100 万人を対象にする教育とでは変えないといけないんですよ。逆に言えば、教育への投資を 3 倍、4 倍ともっとやる。最近、中国や韓国に行く機会がありますが、全然教育への投資が違うんですね。

では、都道府県レベルで一体何ができるのか、国全体でどうするか。大村さんは議員をやられていたので、国の視点と地方の視点から両方からみることができるので、そのあたりをどう県政に反映させていくのかということを含めて、視点を少しそういうところにもっていった形で、教育をこれから展開していただければ大変ありがたいと思います。やはり我々が育ってきた団塊の頃と全体のフェーズが違ってきていますから。上り調子な日本が今はステーブルというか、そういう状況になってきていますので、そのあたりをどう考えていくのかということが今問われているんではないかと思います。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

今回、委員になって、はっきりと確認しておきたいことが一つだけあるんですけれども。

今回の会議というのは、愛知県の教育を議論する場なのか、教育全般の話をやるのかと。実は、違うと思うんですよ。私自身、今日来た立場というのは、愛知の教育の話であると。教育全般の話としては、いろんな委員の方からいろんな意見が出て、ああそうだなということがたくさんあるんですけれども、愛知県の教育というふうに絞った場合だと、愛知という立ち位置を前提にした話にならなきゃいけない。それは、知事がおっしゃっているみたいに、「世界と闘える愛知」をどうやって作るか。東京、大阪とは違う人材育成をどうやっていけばいいのか。愛知県の特徴を考えた場合に、公立が有利で、それがいいのかいけないのか、公立をガーンと上げる必要があるのか、あるいは私立をガーンと上げるのか、それとも違う道があるのかとか。あるいは、愛知県はモノづくりの県で、今、モノづくりはどんどんと海外に出ていってしまう。海外に出て行ってしまうと、小さな町工場に入った工業高校を出た子も、ある日突然にインドネシアで働かなくちゃいけないという時代になってきている。そういう時に、ちゃんとそんな状況に適応できるような教育を考えていかなければならない。これって、愛知の特徴だと思うんです。愛知の特徴を前提とした議論。

次回以降、議論を進めていく上で、愛知の教育の話を中心に議題にするのか、教育全般の話をするのかということをおっしゃっていただくと、私達も議論に参加する時にやりやすいなと思いまして。

＜大村知事＞

まず、愛知の教育がどうあるべきか、どうしたいのかと、どう持っていきたいというのが、もちろんメインですけれども。で、だんだん地方分権が進んでいるので、相当やれることはやれると思うんですが、ただ自分の個人的な思いだと、他の分野は、相当、県でやれる分野は増えているんですが、教育はまだ少ないという感じはしますね。やっぱり国全体の統一性、最後は大学がオール・ジャパンだから、愛知県だけ全く別のカリキュラムなんとかって、そんな簡単にできないのはそうかもしれないけれど。そこがちょっとあるもんですから。

私の思いは、愛知の教育をこうしたい、こういうところを直していきたい、こういうのを議論だけでなく具体的に変えていきたい、具体的にこういうのを作っていきたいとか、そういうのをやるのが一つと、もう一つあるのが、じゃあ我々がこういうことをやろうとしているのに、国全体のあれでできないというんだったら、文科省に直せと、変えろということは言うべきだと思うんですね。それは大いに言っていきたいというふうに思っていますんで。まあ、文科省ぐらいのことだったら、自分も声は大きい方なので、言えれないでもないし、仲間の国会議員も多くいるので。それくらいのことはやってやろうかなと思っているんです。

＜漫画家　江川達也氏＞

結構、名古屋市教育委員会と愛知県教育委員会は仲が悪いと聞くじゃないですか。（笑）これって、名古屋市教育委員会も含めてということなんですか。元先生だったんで、内情はちょっと知ってますけど。

＜大村知事＞

人事権の何とかというのはありますけれども、トータルは仲良くやっていますから。個々の話はあれだけど、トータルの話は、まあそう違わない。こんな感じじゃないですよ。

＜漫画家　江川達也氏＞

愛教大が統一する時に、大変だったんですよね。

＜大村知事＞

まあその話は聞くけど。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

今は仲良くやっているから。（笑）

＜大村知事＞

まあ、時間は来ましたけれど、最後にもう一つ、愛知の教育の課題では、こういうのがポイントだとかあれば、ぜひ皆さんから一言ずついただければと思いますが。江川さん、いかがですか。

＜漫画家　江川達也氏＞

僕自身は、何回も言いますけれども、結局、今の時代は、改革するのであれば、既にメディアが発達してきていると、それに対応するたけの教育を早く作んなきゃいけないというのはあると思いますけれど。旧態依然とした、昔の教育もありですけど、それプラス、教員の人達が校務分掌で仕事が忙しくて、いろんな形で生徒に向き合えないとか言ってますけど、結局、効率悪いようなシステムを教員に与えていると思うんですよね。やっぱり、マクドナルドじゃないけど、どんな人が入ってきても、ある種の教育機関を経れば、そこそこ教員ができて、その教員をやった後も、教員をサポートするいろんなシステムを、インターネットを使いながら、例えば、アニメーションや、先程アニメや漫画とか出てたと思うんですけど、教育が今までアニメや漫画をすごい下に見てて、バカにしてきた、バカ

にしてドロップアウトした人が、低賃金で頑張ったんで、世界に冠たる、俺はちょっとオタクはどうかと思うんだけれど、アニメ王国、漫画王国ができてきたんだけれども、それも斜陽になり始めているとは思っているんですけれども、教育研究所みたいなものを作って、メディアやそういうものを活用して、テレビやいろんなもの、インターネットよりも勝つような教育の新しいシステムの構築をいち早くすれば、無駄な忙しさもなくなると。

俺、たまに趣味で放送大学を見ているんですけれど、放送大学の中でも面白い授業が結構あって、ちょこちょこ見てるんですけど、10 人ぐらいがいろんな面白い同じ課題に対して、ビデオを撮って教えるというふうにすれば、それを見れば、単なる知識は入るわけだし、面白く入るし、そういうふうに効率化できるのに、全員が全員、こういうの教えなさいみたいな感じで、みんなの裁量でやりなさいみたいな。知識を教えるのは、もっと効率よく、歴史をアニメで見せるとか、アニメや漫画も、生徒が作れるように指導するとか、そういうふうにして、どんどんメディアの方向の部分を発達させていけば、普通の本来の人間と人間の付き合いの方に、教員が時間を割けるようになるわけで、そこら辺の教員をサポートできるようなしっかりした組織というものを作れば、いろんな問題も解決するし、実際に空理空論で終わらない形になると思います。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

私も、愛知の教育というテーマで言うと、これだけメディアの方の関心がある中で、中心はどこかと言うと、やっぱり複合選抜を中心とする今の入試制度について変えてほしいな、どう変わるんだろうかという関心とか期待感があると思います。

この議論というのは、まず、一番冒頭に知事から分科会をつくってもいいよというお話しがありましたけれども、そういうような場の方が、話が早く進んでいくのかというふうに思います。そういう話がスタートしてしまった以上、今中学生をお持ちの家とかは期待感を持って、どうなるんだろう、自分のところは関係あるんだろうか、自分の学校には関係ないんだろうか、という視点で当然見られる。さすがに、現在の中３には間に合わないと思いますけど、あんまり時間をかける話ではないと思います。分科会でクーッとスピードを上げて、現在の中２とかというところぐらいから変えていくというような、そのテーマに関してはスピード感を上げていった方が、県民の方もより理解していただけるのではないかと思います。

＜愛知県経営者協会専務理事兼事務局長　柴山忠範氏）

ちょっと今の話とは変わるんですが、私は、最終的に社会人となって、いわゆる県民として生活するということになった時に、どういう層を育てていくのかということがないと、結局は、その時のブームによって、子供や保護者が右往左往している。今見てると、キャ

リア教育なんて、私も非常に不満があるのは、みんながイチローだとか、そういうちょっと特殊な人達を目指しているようなところがあって、健全な、いわゆる社会の基礎となる人達の育成は、あまり十分にできていない。会社の中でいうと、基盤的、基幹的な社員というのは、どちらかというと愛知県外から採用してきた人を上手に育てて、そういう人達が中心となって支えているという面が少なくないわけで、そういう面でいくと、愛知県の教育を通じてどういう県民をつくっていくかというところがないと、結果的に教育問題について答えが出てこないような気がします。

ただ、あまり議論が拡散してしまうとよくないので、冒頭申し上げたように、社会を支える基盤となる人達をきちんと作っていくというところにベースを置いていただきたいと思います。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

こうした懇談会は、ゴールは議論しやすいんですけど、じゃあ、具体的にどうアクションするかというところがなかなか見えてこないのが、懇談会の特色だと思うのですが、私、もし予算化できるんだったら、こういうアイデアも面白いんじゃないかと思うんですね。例えば、今、ｉＰａｄとか相当高いですけど、愛知県の企業さんからいろいろと寄付を募って、全校は無理かもしれませんけど、初年度、ある地域１校を選抜して、30 校ぐらいの生徒に持たせる。変なサイトにアクセスしないように、きちんと管理をしなければいけないんですけど、例えば、キンドルという電子書籍をダウンロードして分からないところを調べられたり、派生的な知識がどんどん広がっていくんですね。例えば、アイ・チューン・ユニバーシティというようなコンテンツなんかは、海外の大学の先生の授業がフリーで見られる。今の教科書というのは、印刷コストがかかって、もっと学びたい子には極めて悪平等です。

例えば、電子書籍と新しいモバイルツールなんかを使えば、子供達がさらにそこを深く突っ込んでいく。補習なんかも、大学生のボランティアグループとネットワークすれば、スカイプなんかで、「お兄ちゃん、ここ分からないんだけど」ということで補習もできる。新しい時代のツールと地域のリソースを組み込めば、もっとたくさんの内容と学んでほしいコンテンツを愛知県独自で入れられると思うんですね。そういうことを社会実験としてやりながら、弊害があるのかどうかとか、新しい時代のイノベーションを起こせるような知識はどうあるべきかということを、同時並行的に学んでいただける可能性もあるのではないかと思います。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

私は１点です。私立あるいは一部の公立では、学校独自の入試問題作成や、独自のカリ

キュラムを学習指導要領から少し外れてやっているケースがあります。そういう学校で実績を上げていることを考えると、今よりもっと私学教育を充実させることよりも、愛知県の教育自体が、学習指導要領や教科書から少し逸脱してもいい、そういう教育特区を標榜したらいいと思います。テーマは、国際化教育やグローバル人材育成などにして、その教育のモデルとして愛知独特の教育のやり方や選抜の仕方を試行してみるのはどうでしょうか。もちろんベースとしては国の学習指導要領に基づくわけですが、県の独自性も認めてもらうわけです。アメリカでは、国が定めた教科書もなければ、学習指導要領もない。文科省そのものがない。州ごとに自由にやっている。日本ではまず、愛知県で試行してみてはどうかと思いました。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

学校教育というのは、社会に出た後に基礎的に生きていくためのいろいろな必要なものを学ぶものです。要は、それぞれの段階で、自分が伸ばしたいこととか、やりたいことをできるような機会と場所をどう設定するか。上の学校にくればくるほど多様化していった方がいいと、そういう面で教育制度は考えるべきだと思っています。基本的に、全体と全部底上げしていく教育をやるのか、或いはその中でももっと伸びるタイプをもっと伸ばしていくのか、その両面をどうバランスとっていくか、そういう面で、学校の特色などいろいろなことを考えていかなければならない。

もう一つ、県でモデルを出した時に、地方ができるように国が考えていってほしいと思う。そういう力になっていかなければいけないと思っています。そこらへんは知事さんの先程言われた力でやっていただきたいと思っています。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

知事がおっしゃった高校の入試制度の改革、特に高校入試ですね。そこは我々が目標として、課題として承った方がよろしいのかどうか、そこの確認を一つお願いしたい。

それ以外にもいろいろな意見が出ましたが、そういう意味で言えば、愛知の特徴をどう出していくのか。一つは、愛知県の県内大学進学率が非常に高いので、ただ７０％ぐらいで満足しているわけではなくて、これを８割ぐらいにするような魅力ある大学を作りたいと思っています。愛知県の人達がどんどん来てくれるような教育を、河合塾さんと協力しながら、江川さんにあまり愛教大の悪口を言われないように（笑）、大学づくりを進めていきたいということを含めて、高大連携のあり方とか、多面的に教育問題をやっていくと同時に、冒頭でも言いましたが、これからの日本を考えると、少子化の中で国際化ということは避けて通れません。これは出る人もそうですが、来てくれる外国の人達をどう迎え入れて、どう取り入れていくかという話も、これから大きな課題になってきますので、そう

いう視点も是非考えてやっていただきたいと思います。

＜大村知事＞

今、松田学長が言われました、入試の改革は、やっぱり是非やりたいというふうに思います。もちろん専門家の皆さんに、きちっと作ってもらわないといけない、方向性だけ示したいなと思います。今日いただきましたご意見を、今日ちょっとフリートーキングなんであれですけど、是非ですね、さっき申し上げましたが、愛知県で何か、そのモデルというか、何か国の今までの方式からちょっとというか、だいぶ逸脱するくらいのこともやっていきたいなとも思ってますし、できたら文科省にいろんな意味での制度改革だとか法律改正も含めて、そういったことも要求していったらどうかと。これは橋下さんとも何かぶつけてやろうな、という話を言ってるんで、是非そんなことも含めてやっていければと思っております。今日は長時間にわたり、自由闊達なご意見ご議論をいただきましてありがとうございました。

どういうふうにやっていくかは、今日１回目なので、また考えていきたいというふうに思いますけれども、今日、本当にありがとうございました。本当、いろんなご意見をいただきまして、貴重なご意見ばかりでございます。本当に盛りだくさんなので、また色々精査して、次は分野分野ごとにもうちょっとフォーカスしてですね、議題を設定してまた後日程調整などもして、ご連絡させていただきたいと思っています。スピード感を持ってやるということは大事なことなので、テーマを決めたらしっかりと具体的なものを出していきたいというふうに思っております。今日は長時間どうもありがとうございました。

（以　上）